

智光(ともみつ)と初めて会ったのは中学の頃で、それからずっと、気づいたら隣にいる存在になっていた。

『飯行くか』

『部屋来い』

誘い方はいつも一方的で、それでも連絡をよこすのは決まって智光の方だ。

いつの間にか、それが当たり前になっていた。智光の部屋に上がることも、なにをすることもなくただら過ごすことも、全部が日常の輪郭に溶け込んでいた。

『今日、来い』

だから今日も、それだけのメッセージひとつで僕は靴を履いていた。

智光のアパートに着くと、やはり鍵は開いていた。部屋に入ると台所の方から「そこ座ってろ」と声だ

けが落ちてくる。

「うん」

一人暮らし向けの、ワンルームの部屋。使い込まれたローテーブルとフロアクッション。

返事をして、いつものクッションに腰を下ろし、壁に背中を預ける。

(智光、今日はなにを作ってくれたんだろ)

智光が皿を二枚持って戻ってきた。無言で一枚を僕の前に置いて、自分はその隣に座る。テレビがついて、他愛のない話をして、いつも通りの時間が流れていく。

居心地がいい。だからこんなに長く続いているんだろうと思う。だから、こんなふうに自然体でいられた。

食べ終えてテレビを眺めていたとき、智光が言った。

「最近身体が固そうだな」

「そう？」

「そうだ」

それだけ言って、もう僕の後ろに回っていた。

「ほぐす。力抜け」

大きな手が両肩に乗る。

「え、あ……うん」

（急に……？）

智光の親指の腹が肩甲骨のきわをゆっくりと押す。力加減が妙に的確で、凝り固まっていたところに指が沈み込む感覚がある。

こんなにマッサージが上手かったのか、と戸惑いながら、されるがままになっていた。

（丁寧すぎる。なんか、確かめるみたいな触り方で

……。気持ちいいのは、気持ちいいけど……)

すべての動作がゆっくりで、急かさない。まるで壊れ物に触れているような、静かな手つきだった。

「ここも張ってる」

声のトーンは一切変わらない。でも指の向かう先が、肩から脇の下へ、そしてじわじわと前へとずれていく。

「ちょ、ちょっと。智光、肩だけでいいって」

「こっちも肩に繋がってるから」

「でも……」

「いいから」

それ以上なにも言わせない、短い声だった。指が脇の下から滑り込んできて、両手がTシャツの裾を掴んだ。

「え、ちょっ……！」

あっという間にTシャツを引き剥がされる。反射的に両腕を胸の前でぎゅっと交差させた。

「なんで脱がすの……！」

「邪魔だから」

「でも……！」

振り返ろうとしたら肩を後ろから押さえられた。そのまま背中に手が回って、インナーの裾に指がかかった。

「待って、それは」

ぐっと引き上げられて、あっという間に腕を通り抜けていく。反射的に両腕を胸の前でぎゅっと交差させた。

「っ……見ないでよ！」

「見てない」

「見てる……！」

声がかすれた。智光はそれに答えなかった。ただ、少し間があった。

（智光は知ってる。僕がカントボーイだって、ずっと前から知ってる。でも——）

知っていることと、見ることは、違う。言葉では伝えていた。でも身体を見せたことは、一度もなかった。中学からずっと隣にいたけど、こんな場面は想定していなかった。

「力抜けって言っただろ」

「抜けるわけ……っ」

「腕、どけろ」

どけられるわけがなかった。両腕をさらにきつく胸に押し当てて、首を横に振る。

「……やだ」

そう言ったのに智光は腕ごと後ろから包み込むように、大きな手を前に回した。

（え……？）

逃げる間もなく、腕の上から手のひらで押さえ込まれる。そのまま、じわじわと、腕を胸から引き剥がしていく。

「っ、やだ……っ、待——」

腕が、外された。

「あ……」

胸が、露わになる。智光の手のひらが、そのまま静かにおっぱいの上に乗った。